

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	大韓民国	
学校名	静岡県立浜北西高等学校	氏名	桜井 唯稀	学年	2年

1 目的・応募理由

私は小学生の時、友人に K-POP を勧められ韓国が好きになりました。しかし、韓国のことを知るにつれ日本と韓国の間には、文化の違いや過去の戦争、国の支配が原因で起こった差別や偏見があることを知り、私はこれからの日韓の関係を更に良いものにしたいと考えるようになりました。友好関係を築いていくために互いの文化や価値観の違いを理解することが大事だと考えました。同時に SNS で外国人に人気の都道府県ランキングを見たとき生まれ育った静岡の魅力がまだ知られていない事に気づき、韓国の人に静岡の魅力をもっと知ってもらいたいと考えました。更に日本の文化として有名な書道と日本で生産量1位の静岡のお茶を活かし、韓国の人に日本の文化を伝えながら静岡の魅力について知ってもらいたいと考えました。そのため私はふじのくにグローバル人材育成事業に応募しようと考えました。

2 活動内容

私は日韓の関係の修復を目的とし、静岡の特産品のお茶を活かし、静岡や日本の魅力を伝えたいと考えました。そこで私はお茶を墨の代わりに使う書道である抹茶書をし、お茶の香りを楽しみながら書道の面白さも体験してもらいたいと考えました。更に韓国の文化を私が実際に体験したり、韓国で生活してみても感じたことを帰国後に SNS や事後研修を通して広める活動を行いました。他にも韓国ならではの食の文化や有名な建造物である景福宮にチマチョゴリを着て訪れたり、事前に日本で韓国語の勉強をしていき、韓国の人と韓国語でコミュニケーションをとれるようにして実際に韓国で英語や翻訳をあまり使わないように頑張りました。

語学学校の放課後や休日は、語学学校でできた友達や同じホームステイ先の子と一緒に韓国のとても有名なピョルマダン図書館にいたり、漢江の噴水ショーを見に行ったり、ナクサン公園やソウルタワーの夜景を見に行きました。また語学学校の人たちと一緒にロッテワールドに行ったり、ダンスレッスンを受けに行くなどとても充実していました。



3 感想等

私はこの留学を通して、異文化の中で生活することで培われた価値観の広がりや主体性を得ることができました。もともとこの留学を決意した理由は、韓国語をもっと話せるようになりたいという強い思いがあったからです。日本でも韓国語に触れる機会がありますが、実際にその言語が使われている環境に身を置いて生活したいと考え、留学を決めました。しかし、最初に親や祖父母に思いを伝えたときには期待していた反応が得られず、とても悲しい気持ちになりました。それでも諦めずに思いを伝え続けた結果、留学の実現につながりました。また、トビタテへの応募も最初は自信がなく不安がありましたが、書類審査を通過し、面接でも無事に合格できたことで、念願の韓国留学が叶いました。やりたいことが見つからない時期が続いていた中で、初めて強く「やってみたい」と思えたことだったので、合格の知らせを受けたときは本当に嬉しかったです。出発前は、日本語が通じない環境で3週間も生活できるのだろうかという不安がありましたが、韓国で行きたい場所がたくさんあったことがモチベーションとなり、前向きに準備することができました。実際に韓国で生活してみると、文化の違いや新しい発見が多くありました。韓国の食べ物には辛いものが多いイメージでしたが、実際には辛い家庭料理も多く、食事を通して食文化の豊かさを知りました。また、韓国ではカフェ文化がとても発達しており、地下鉄やバスの中でもコーヒーを持っている人が多いことに驚きました。さらに、日本では公共交通機関での電話や飲食がマナー違反とされる場合がありますが、韓国ではそうした制限があまりなく、実際に電車内で電話をしている人が多かったことも印象的でした。そして、目上の人を敬う儒教文化が根強く残っているため、言葉遣いや行動に気を配る人々の姿勢から文化の違いを強く感じました。一方で、明洞で爆破予告が出たり、デモ活動を見かけたりと、少し怖い経験もありました。また、買い物の際に店員さんの言っていることが聞き取れず戸惑う場面も多く、語学の壁を痛感しました。それでも時間が経つにつれて語学学校で学んだ単語や文法を使って会話ができるようになり、帰国する頃には聞き取り能力が大きく向上したことを実感しました。この留学で挑戦する勇気を持ち、自分で選んだ道を実行できたことは、これからの自信につながる大きな経験となりました。ホームステイ先の友人と一緒にさまざまな場所を訪れ、日本ではできない体験を多くすることができ、とても楽しい時間を過ごせました。そして、この留学をきっかけに TOPIK を受けたという新しい目標も生まれ、帰国後も韓国語の勉強を続けています。

